

Title	セルフの各側面の重要性と評価を統合したセルフ・エスティームについて
Author(s)	酒井, 佐枝子
Citation	大阪大学教育学年報. 2 p.209-p.217
Issue Date	1997-03
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/10540">https://doi.org/10.18910/10540</a>
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# セルフの各側面の重要性と評価を統合した セルフ・エスティームについて

酒井 佐枝子

## 【要旨】

従来のセルフ・エスティーム (SE:自尊心・自尊感情・自己評価) の研究においては、セルフを全体として肯定的に評価しているかどうかの問題とされた。しかし近年のセルフ研究においてセルフは多くの側面から構成された動的なものとしてとらえられるようになってきた。そこで本論では各側面におけるSEを調べ、それらを統合したものとしてのSEを測定することの意義を提唱したい。

ところで各個人にとってセルフの各側面は全く同じ価値をもつものではない。ある人にとっては身体的側面が重要であり、ある人にとっては精神的側面が重要である。さらに身体的側面といっても容姿を重視する人もあれば運動能力を重視する人もある。同様に精神的側面といっても知的側面を重視する人もあれば人格的側面を重視する人もある。このようにどの側面を重視し、その側面においていかに評価しているかということがその人のSE全体に大きな影響を与えていると考えられる。従って各側面からSEを調べる場合にはその人がその側面をどれほど重要視しているかを調べる必要がある。以上をまとめると統合的なSEを知るためにはセルフの各側面 (次元・下位概念) をどれ程重視し、かつ肯定的に評価しているかを調べ、それを統合して判定することが有意義だと思われる。

## 1 はじめに

近年、セルフを多次元で動的な統合的モデルとしてとらえていこうとする動きが活発になってきている。Damon & Hart (1988) は「セルフ・アンダースタンディング」(SU:自己理解) という多次元的発達モデルをかけた、従来の「表層から深層へ」もしくは「物理的から心理的に」という一方的な発達次元に関する視点に批判を加え、セルフを構成する複数の属性のすべてが児童初期から青年後期までのすべての期間を通して独自の発達の変化を遂げることを示した。

ところで、このような多次元で動的なセルフに対する評価的態度であるSEについては、その概念の定義づけは研究者により多様である。Rosenberg (1965) に代表されるように一般的にSEの測定方法は、調査者があらかじめ設定した全体的な自己に対する態度についてどの程度あてはまるかを求める形式のものがほとんどである。つまり個々のセルフの各側面についての態度や感情を総合した形でSEを表すのではなく、全体的な自己に対する態度や感情を問う形式のものが多かった。このような測定方法が用いられた背景には「全体としてのセルフ」というものが実際に態度の上においても存在していると考えられ、また「部分としてのセルフ」、すなわちセルフの各側面のそれぞれの間には一貫性がみられないため、全体的なセルフについての態度の方が測定しやすかったという経緯があると考えられる。しかしこのような測定方法では、近年のセルフ研究のモデルが考慮されておらず、個々人によるセルフの各側面についての自己認知の構造の違いまでとらえることはできない。また社会的望ましさを基準とした評価にセルフがどれ程あてはまるかを測定することとなり、個々人のSEを正確に反映しているとはいえない。

そこで本論では第1にSEという概念の整理を行い、第2に近年のセルフ研究の理論を概観し、第

3に他者に代表される社会的環境が個人に及ぼす影響に着目し、統合的SEを把握することの意義を考察する。

## 2 セルフの多次元性に関する視点

### 1節 客我としてのセルフ

Oosterwegel & Oppenheimer (1993) はセルフシステムの統合的モデルを提示した。セルフシステムとは様々な領域についての自己知識が全体として集合体を形成したときの「かたまり (conglomeration) (Oosterwegel & Oppenheimer, 1993, p38)」である。従って種々の自己概念はセルフシステムの下位概念としてとらえられ、セルフシステム内の各領域と関連していることになる。

セルフシステムを構成する各下位自己概念は、環境との相互作用において発達し、個人が機能することによって互いに影響を及ぼしあう。これにより、セルフはより複雑で多次元なシステムとして形成されていく。その形成の過程には、個人自身の積極的かつ制御的な役割がみられる。セルフシステムは現実自己と可能自己からなり、個人自身の視点から認知した時や他者の視点から認知した時によってその認知される形態や機能は異なってくる。

ところでOosterwegel & Oppenheimerは、セルフシステムの各下位概念は自己記述によってのみ明らかとなり得るものとしてとらえている。このような部分的な「me」が統合されてセルフシステムを形成している。Damon & Hart (1988) のSUのモデルにおいて描かれる主体としての自己も、哲学的、心理的分析で探索されるような主観的自己の領域の大部分を覆うものではあるが、これはあくまでも「I」の理解を問題にしているのであり、「I」それ自体を問題としているのではない。従って「I」を理解する上で機能しているのは「me」であり、その意味で「I」は「me」を通してしかとらえることができないものである。同様のことがこのセルフシステムの理論においても留意されている。自己についてのすべての知識は、客我である「me」の一部であり、主我である「I」はその場その場において体験している内容や前後の文脈からは切り離すことができないものである。「I」は考える人としての動作主であり、自己概念を組織化し、構造化する主体である。このような「I」の領域の特徴である動的な自己の姿を正確に反映する必要性により、近年における自己を多次元で動的な統合的モデルとしてとらえようとする動きが高まってきたといえる。しかし実験的研究においてはこのような「I」の動的な構造をとらえようという試みは不可能であるため、「me」を通して見た「I」に、少しでもその本来の姿である動的な視点を取り入れることによって、より自己の現象の本質的な部分をとらえようと各研究者は試みているのである。

この「me」の一部である自己記述は階層的なカテゴリーに分類することができる。個人の経験という文脈に沿って各下位自己概念は構成されるわけだが、それぞれの下位自己概念についての記述的カテゴリーは「一般的記述」と「状況特殊的記述」に分類することができる。「一般的記述」とは、あらゆる異なる文脈のすべてに関連した自己概念にとって妥当な記述であり、「状況特殊的記述」とは、1つの特定の経験の中での文脈に関連した自己概念にのみ適用できる記述とに分類することができる。一般的記述と状況特殊的記述の相方共に連続体を形成し、相互に関連し合いながら変化していく。また自己記述が個人において持ちうる重要性は個人内、個人間の状況により異なる。ある記述は個人の中心的、核的な特徴として個人の中で認識されるであろう

が、他の記述の中にはその個人にとっての関連性が低く、より周延的なものも存在する。どのような記述がより個人関連的で中核的なものであり、またどのような記述がより周延的なものであるかについては個々人によって異なっている。Markus & Wurf (1987) は作業自己概念 (working self-concept) という概念を用いてこのことを説明している。彼らは自己概念の全てが常に同時に機能しているわけではなく、個人の経験における文脈に応じて特定の瞬間に特定の自己概念が活発となり、機能すると考えている。そして一般的な社会環境下での状況刺激である他者との相互作用、社会的比較や、個人内の動機づけや感情、自己評価の直接的な結果などによって活性化された自己表象が作業自己概念として接近可能となると考えている。その瞬間における自己概念はたえず変化し得るものとして考えてはいるが、そのような中でも作業自己概念は接近し得る自己知識の変化の一時的な状態をとらえるものとして考えられた概念である。

この作業自己概念という考え方は自己記述について考えるときに非常に重要な点である。自己記述は個人が意図的に行うものであるため、自己記述そのものにも様々な特徴が存在し、セルフシステムの組織にも影響を及ぼす。どのようにセルフを記述するか、もしくは他者から認知されたセルフが記述されるかについての特徴をOosterwegel & Oppenheimerは3つ取り上げている。まず第1にその肯定性についてである。セルフシステムは全体として肯定的であることが望ましいのだが、多くの人の自己記述にはたしかに肯定的評価ないし肯定的感情をともなったものが見受けられる。第2の特徴はその抽象性である。これについての研究はあまり多くないが、認知発達に伴って抽象的な自己記述が増加することが予測される。第3には自己記述の個人的関連性があげられる。先の作業自己概念においても述べたが、自己記述をすること自体がその個人にとってどれ程重要なことであるのか、又は記述内容の重要度によってセルフシステムの明らかとなる側面が異なってくるといえる。

セルフシステムが環境、特に社会的環境との相互作用において発達することは前にも述べた。社会的環境が自己に及ぼす影響については、Cooley (1902) の鏡映自己やMead (1934) の「一般化された他者」の概念など、多くの研究者が述べているところである。このように社会的環境からの作用により形成されていく自己概念を、社会的自己という呼び方で表すこともある。Oosterwegel & Oppenheimer (1993) は、個人が社会的環境のうち他者に影響される場合、特徴的な3つの要因を取り上げている。まず第1に他者の特徴であるが、他者とは特定の個人の経験における文脈に関連した特定の他者である必要があり、自己概念とその形成にはその特定の(重要な)他者の態度が影響する。これは後で「他者意識」という形でも取り上げる。第2の特徴としては、個人の側の要因があげられる。認知発達にともなって、自己記述の文脈における他者についての話題も変化していき、またその内容自体も細分化されていくといった変化が見られる。第3に状況の特徴があげられる。つまり個人が他者の影響をうけるときに、個人や他者の置かれている状況によって記述される自己概念の様相も変化してくる。このように社会的文脈と関係する重要な他者や状況の影響は、特定の個人に特定の役割を果たし、その個人の自己概念に累積されていく。他者の重要性をとらえている概念として「まなざし」と「他者意識」をあげることができるが、これらについては2節で取り上げることとする。

今まで自己概念に及ぼす社会的影響をみたが、自己概念は決して受け身的な概念であるだけではない。その能動的働きについて「積極的な人 (the active person) (Oosterwegel &

Oppenheimer,1993,p12)」と表現できるように、個人は自分自身の意志を持つ行為者であり、動機づけによって自分自身についての情報をコミュニケーションするような行動を積極的に行うことがある。自己記述における特徴としての肯定性をあげたが、個人の自己認知における連続性の経験において、この積極性はしばしば自己認知の肯定性と関連しているといえる。このように一貫したセルフを保持し続けるためのいわば個人の正当化をGreenwald(1980)は3つの現象にまとめている。すなわち自己中心性、良い効果性、認知的保守性である。自己中心性とは、知覚と記憶における自己参照と、相互作用におけるセルフの役割の過大視に関係するものであり、良い効果性とは成功で面目を施すが失敗では責任を否定するような傾向として記述されるものである。また認知的保守性は対象やカテゴリーの保護、承認の偏り、記憶の書き直しなどにみられる知識構造を保つ傾向であり、これらの現象によって個人は積極性を保ち、自己実現の方向へ進んでいくといえる。

「me」の一部である自己記述からみたセルフの特徴をみてきたわけだが、セルフは他者を中心とする社会的環境からの影響や個人の積極性など様々な要因が相互に関連し合いながら形成されていく。

## 2節 セルフの認知における他者の必要性について

社会的環境が自己に及ぼす影響について、Oosterwegel & Oppenheimerは、他者の特徴を第1にあげている。他者が個人に影響を及ぼす場合、他者にセルフがどう見られているかを意識した時と、他者の特徴に注意を向け、セルフと比較した時とでは、意識の対象が微妙に異なる。次にセルフの各側面に対する認知に際して他者が及ぼす影響を、他者からセルフがどのように見られているかを意識する「まなざし」(梶田、1988、1990)の観点からまとめる。さらに他者自身の持っている諸側面の性質がセルフに与える影響を「他者意識」(辻、1990、1993)からまとめてみる。

### 「まなざし」

「われわれの自己イメージや自己感情は、われわれのふだん接触する他者が、われわれをどのようなものとして見、どのように判断しているかに大きく依存している。(梶田,1988,212頁)」と述べられているように、われわれの自己意識の内容は、決して自閉的な内面世界の中で自成的に形成されるのではなく、周囲の人々の特性と比較したり、また理想像とする事などを通して認知され、形づくられていく。梶田は「まなざし」という言葉によって、このことを説明している。まなざしとは、「意識を照射するサーチライト(梶田,1988,210頁)」であり、まなざしを向けられることによって、個人は匿名性という埋没された状況の中から、一人の個人として対象化される。そしてさらに個人としてのセルフの在り方に、注意が焦点づけられていく。まなざしには、セルフに向けてのまなざしや他者のまなざしがあり、相方共に独立性を保ちながら発達していく。他者のまなざしの意識とは、他の人が自分の考えや行動をどう見ているかに気づくことであり、そのまなざしによって個人はセルフについての認識を深めていく。他者からどのように自分が見られているかを意識するには、初期の段階において他者からの視線そのものが自らの存在に注がれ、その視線に気づくことによってセルフへの注目が生じる。そのような段階を経るうちに、他者の目が個人の内に育まれ、取り入れられていくようになり、梶田のいう「他者のまなざし」が内在化されることになる。さらに長い年月における他者との接触の経験によって、内在化されたまなざしは特定の他者にとられることのない一般的他者のまなざしとして、個人の行動、意見、価

値観などの規範としての機能を果たすこととなる。まなざしについては福井（1984）も取り上げており、人間同士の出会いの原点であるまなざしによってセルフが形成される様相を述べている。

ここでは他者そのもの持っている能力や性質、意見などはあまり問題とされることはなく、自分についての関心が問題である。しかし、セルフの各側面について認知し、それに対しどう思い、考えるかということになると、他者自身の持っている各側面の性質にも意識が向かわないわけにはいなくなる。次に他者へ向ける注意や関心、意識である「他者意識」についてみていく。

### 「他者意識」

「他者意識」とは、注意が他者に焦点づけられたときに、他者へ向ける注意や関心、意識のことであり、他者の外面ばかりでなく、私的側面である他者の動機や感情、思考、理念などの内面に対する関心も含む（辻、1993）。このような私的側面に対して向けられる他者意識には誤認などの可能性も含まれているが、それでも正確な認知が追求されていることには変わりはない。他者意識を構成する下位概念としては「内的他者意識」、「外的他者意識」、「空想的他者意識」の3つがあげられる。「内的他者意識」とは、他者に対する直接的な注意を向けたときに明らかとなる意識であり、他者の内面情報を直観的に読み取ろうとする意識である。「外的他者意識」は、他者の美しさ、面白さや格好のよさなどの外面に対する意識である。また「空想的他者意識」は、他者に対する回想的な注意を向けた時に生じるもので、他者について考えたり空想をめぐらせながらその空想的イメージに注意を焦点づけ、それを追いかける傾向である。これらの他者意識は個々人により異なる様相を持っているため、同一の他者に対して各個人が持つ他者意識は異なることとなる。

このような他者のまなざしや他者意識を自己の基準としたり比較の対象とすることで、セルフの各側面は形成されていく。従ってセルフを認知することは、ある意味ですでに評価が含まれた認知が行われていると考えることができる。このような評価的認知が行われる理由としては、前にも述べてきたように、第1に、セルフは他者からの評価（他者のまなざし）によって大きく影響されるということ、第2に、セルフは他者に関する情報によって大きく影響され、その情報は他者意識として個人の意識の中に取り入れられるということがあげられる。このように他者の存在を取り込むことによって、個人の認知には評価的な要素が含まれることとなる。

このように他者の存在はセルフの中で比較の対象とされたり、理想像または良導者的存在として、セルフの中に取り入れられていく。取り入れられた他者の存在、特に重要な他者の存在は、セルフの感情や動機・行動面に大きな影響を与えることとなり、セルフシステムの発達において特定の文脈に対し影響を及ぼす。そして他者や一般化された他者との比較の結果として、その側面に対してある特定の感情が生起することとなる。これらのセルフの各側面の一つ一つに対する感情の総体として、全体的なセルフに対する感情や態度であるSEが形づくられていくと考えられる。

「セルフ研究は個々人の固有性を尊重した上で、その認識の構造や機能の普遍性、法則性を解明すべき（遠藤ら、1992、p69-p70）」であり「自分なりの基準」をもとにした研究が必要である。本論ではその基準となる物差しの一つとして他者の存在をとらえており、全体的なセルフに及ぼす影響の一つとしてまとめてみた。

### 3 SEとは

SEは一般的には、セルフの価値と能力に対する態度や感情を表しているのだが、その定義は研究者により多様である。従来の研究におけるSEの測定尺度の代表的なものとしてRosenberg (1965) やCoopersmith (1967)、Janis & Field (1959) の測定尺度があげられる。これらの尺度は、全体的なセルフに対する態度についてどの程度あてはまるかを求める形式のものであるが、それぞれがSEとして測定しようとしている態度には違いがある。Rosenbergの測定尺度ではSEをセルフに対する肯定的、または否定的な態度として考え、「これでよい」と自分自身を尊敬し、価値ある人間であると考えられる程度を指すとしている。CoopersmithもまたSEを自身に対する是認または非難を表したものであり、自分自身を有能、有意義、成功的、価値あるものと信ずる程度であるとして、測定尺度を作成している。一方Janis & FieldはSEを社会的な適応の感情として考えており、社会的場面における不安や回避行動からSEを測定している。これらの測定尺度ではSEの下位概念や構成要因を取り上げ、因子分析により各次元を明らかにしようとして試みている。しかしこれらの測定方法では、先にも述べたように個々人による自己認知の構造の違いが考慮されず、また社会的望ましさを基準とした評価にセルフがどれ程あてはまるかを測定することとなり、個々人のセルフについての認知構造が正確に反映されているとはいえない。そこでSEの測定方法を検討していくために、まずSEの意味から整理しなおすこととする。

SEの従来の意味を見返すと、SEは個人のセルフの価値についての認知であり、その認知には「重要な他者」を含む人間関係の中で形成されてきた評価が含まれている。Ziller (1973) は個人が準拠点として用いている重要な他者を考慮する必要性について述べており、社会的SE測定法を開発している。またSullivan (1953) は、重要な他者によって自我の価値が低められると、SEの喪失が生じると指摘し、人間関係がSEに及ぼす影響について述べている。さらにTesser & Campbell (1983) は、自己評価維持モデルを展開し、個人が自分自身について他者との関係の中で反映過程と比較過程という2つの過程を通して自己評価を維持するように調節することを述べている。このことはセルフシステムにおいて取り上げた、他者や状況といった社会的環境のセルフへの影響とも一致している。

またSEは社会的環境のみならず、セルフ内における各側面についての重みづけによっても影響を受ける。James (1890) は自己にとって「価値のある」領域における成功がSEに大きく影響することを指摘している。彼は一般的には、 $SE = \text{成功} / \text{願望}$ としているが、セルフに関するモデルからもわかるように、セルフの各側面のあるものは、その人の価値の階層で中心的位置を占めたり、あるものは周辺的に位置づけられたりするので、このような式は厳密には成立しない。またMoretti & Higgins (1990) や遠藤 (1992) は、中心的価値をもつセルフの各側面の要素についての達成や到達は高いSEをもたらすという結果を得ている。したがって、セルフの各側面のどの要素がその人にとって中心的であるのかを知ること、そしてその要素の達成度や到達度を知ることがSEを知る上で重要となってくる。

このようにSEの持つ本来の意味として評価的認知が含まれているということ、そして近年のセルフ研究の動向から、個々人によるセルフの各側面に対する重みづけといった自己認知の構造の違いがSEを考える上で重要な視点となってくるといえる。そのため従来のようなSEの測定方法で

は、セルフの多次元性に見あったSEが測定できないと思われる。そこで筆者はSEをセルフの各側面の一つ一つについての認知の仕方からとらえ、セルフの体系の社会的な性質を考慮するために他者との比較を通してとらえた評価的認知を用いることで、SEを測定することを提案する。

#### 4 SEをとらえる上で取り入れていくべき視点と測定尺度開発の必要性

今までセルフに関する研究における動的で多次元なシステムを概観してきた。セルフは多次元で動的な構造を持った概念としてとらえることができる。すなわちセルフの各側面は、互いに相反する性質を持ちながらも互いに影響を及ぼしあって共存したり、刻一刻焦点化される内容がかわっていくというような性質を持っている。したがってセルフを実証的にとらえようと試みるとときにはその柔軟性、統合性を考慮しなければならない。しかしこのような個人的関連性を考慮せずセルフ研究やSE研究を行っていくならば、個人の実態は充分把握できないだろう。個人がセルフの各側面について認知するときには、必ず何らかの形でセルフ全体に対する感情に影響を与える。このことについて遠藤ら（1992）は「自分が自分を見るとき全体的または部分的のいずれであっても、見ているものについて査定し、評価し、判断を下している。（中略）これがSEの深い言外の意味である（50-51頁）」と述べている。つまり、セルフシステムを構成する各側面とSEとは、相互変換的な関連を持っているのである。したがって本論ではセルフの各側面に着目し、各側面の個人にとっての重要度と、他者との比較から生じる評価的認知から、SEをとらえることを提案する。

##### 1) セルフの各側面に対する重要度

セルフについての記述は、すでに述べたが一般的記述と状況特殊的記述に分類することができる。これらの様々な側面の全てを各個人が重要と考えているわけではない。作業自己概念でも見たように、ある特定のその時点において接近可能なセルフの側面がある特定の時期に重要となり、セルフシステムに影響を及ぼす。つまり自分の置かれている現在の状況などにより、重要性は変化するのである。このように個人の各側面に対する重要性がセルフ全体の中でそれぞれ異なる時、それらすべてを同じ重みづけを持ったものとしてとらえていては、セルフの多次元性を表現したことはない。従って個人にとって重要であるものと重要でないものを選別することにより、セルフの様相は明確となるのであり、現時点でのセルフにおいてどのような側面が重要であると見なしているかを検討することがそのままSEに反映されることとなる。

##### 2) セルフの各側面に対する評価的認知

繰り返し述べていることだが、人がセルフを意識するときには、何らかの形で他者の存在が関わってくる。人は自分一人だけでは生きていくことのできない社会的存在である。乳幼児が母親との情緒的な交流によってセルフの感情的体験や感覚的体験を得、個としてのセルフを形成していく（福井、1984）ことからわかるように、人は誕生した時から、他者を必要とし、他者との関係性の中で成長していく。自分の姿を認知し、セルフについての意識を明確にしていく段階において、他者の果たす役割については「まなざし」と「他者意識」の観点からすでに見てきた。「個人的なものと考えられる自己意識は、同時にその個人が置かれた社会的位置や状況によって、基本的に規定されている」（梶田、1988、171頁）のである。したがって、セルフの評価的認知に



関わってくる他者の存在は無視することはできず、そのような自己認知より生じるSEも他者の影響を受けたものといえる。

以上のようにセルフの各側面に対する重要性と評価的認知は、SEを構成する主要因と考えられる。また従来のSEの意味を見直してみても、これらの視点は組み込まれている。SEの測定尺度も、これらの視点から個々人の自己認知の構造をとらえ得るものを開発していく必要があると思われる。

## 5 おわりに

SEをセルフの多次元性を考慮した上でとらえることの必要性を考察してきたわけだが、セルフの多次元性すべてを取り入れた尺度を作成することは非常に難しい。ここではセルフとSEの研究において、特に重要と思われる要因に注目し、その要因からSEをとらえていくことの必要性を論じるに留まった。筆者はこれらの視点を取り入れた尺度を作成したが<sup>2)</sup>、今後はさらにその内容を吟味し、SEをより包括的にとらえて検討していく必要があると思われる。

注) 酒井佐枝子1996「自己の重視している側面の優劣評価と自尊感情との関連」『日本教育心理学会第38回総会発表論文集』、p 486においてこれらの視点を取り入れた尺度を作成している。

## 引用文献

- Cooley, C.H. 1902 *Human nature and social order*, New York: Scribner.
- Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*, San Francisco: W.H. Freeman.
- Damon, W., & Hart, D. 1988 *Self-understanding in childhood and adolescence*, Cambridge University Press.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 1992 『セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求』ナカニシヤ出版。
- 遠藤由美 1992 「自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討—」『教育心理学研究』40、157-163頁。
- 福井康之 1984 『まなざしの心理学』創元社。
- Greenwald, A.G. 1980 "The totalitarian ego: Fabrication and revision of personal history", *American Psychologist*, Vol.35, pp.603-618.
- James, W. 1890 *Principles of psychology*, New York: Holt, Rinehard and Wiston.
- Janis, I.L., & Field, P.B. 1959 "Sex differences and personality factors related to persuasibility", In C.I. Hovland, & I.L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*, New Haven: Yale University Press.
- 梶田毅一 1988 『自己意識の心理学』第2版 東京大学出版会UP選書。
- 梶田毅一 1990 『生き方の心理学』有斐閣選書。
- Markus, H., & Wurf, E. 1986 "THE DYNAMIC SELF-CONCEPT: A Social Psychological Perspective", *Annual Review of Psychology*, Vol.38, pp.299-337.
- Mead, G.H. 1934 *Mind, Self, and Society*, Chicago: University of Chicago Press.
- Moretti, M.M., & Higgins, E.T. 1990 "Relating self-discrepancies to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings", *Journal of Experimental Social Psychology*, Vol.26, pp.108-123.
- Oosterwegel, A. & Oppenheimer, L. 1993 *The Self System*, Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the Adolescent Self-Image*, Princeton, N.J., Princeton U.P.

- Sullivan,H.S. 1953 *The interpersonal theory*, New York:W.W.Norton.
- Tesser,A.,&Campbell,J.1983 Self-definition and self-evaluation maintenance.in J.Suls,& A.G.Greenwald(Eds.), *Psychological perspectives on the self*, Vol.2. Hillsdale:Lawrence Erlbaum Associates.
- 辻平治郎 1990 「自己意識における視点」『甲南女子大学人間科学年報』15、27-44頁.
- 辻平治郎 1993 『自己意識と他者意識』 北大路書房.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』30、64-68頁.
- Ziller,R.C. 1973 *The Social Self*, Pergamon Press.

## Self-Esteem Considered from the Importance and the Evaluative Perception of Each Aspect of the Self

Saeko SAKAI

Self-esteem has so far been studied from the perspective of whether a positive evaluation is made about the total attitude of self. But this approach to the self has recently been changing. It considers self as an integrative entity containing various aspects and dynamics. Therefore, in this paper, the author would like to suggest the need to reconsider self-esteem from the dynamic and multidimensional view point and propose the significance of measuring self-esteem as an integrative one.

However, each aspect of self does not have the same value for an individual. Some may consider their physical aspects important, while others their mental aspects. Moreover, even when we talk about the physical aspects, some may think about their style first, while others think their physiological ability first. In the same way, when we talk about the mental aspects, some may think about their intellectual capacities first, while others think about their personal characteristics first. Which aspect is considered to be more important and how it is evaluated affect the self esteem itself. Therefore, when we study self-esteem from each aspect of the self, we must consider their relative importance.

In brief, when we study the integrative self-esteem, it is vital to integrate how importantly one perceives each aspect of the self and investigate how positively he/she evaluates it.